

令和3年度 テーマ展

江戸時代の感染症と人々のくらし

日光市二宮尊徳記念館



①牛頭天王扁額（宝暦3年1753）・②木像牛頭天王坐像（元治元年1864）日光市御幸町自治会蔵
③上栗山の牛頭天王幟旗 文化13年（1816）日光市上栗山長研寺蔵
④二宮金之丞（尊親）奉納の牛頭天王幟旗 元治元年（1864）富田高慶書 今市報徳二宮神社蔵

ーはじめに

人類は今、新たな感染症「コロナ」に直面し、苦悩の真ただ中にあります。同様に、私たちの祖先も、死と隣り合わせの感染症に苦しんだ長い歴史を歩んで来ました。

江戸時代には、こうした感染性の疾病を「疫病」や「流行り病」と呼んでいました。具体的には、疱瘡（天然痘）・麻疹（はしか）・虎狼痢（コレラ）などです。この展示は、地域に受け継がれている祭礼や古文書を通して、江戸時代の人々の、疫病に対する対応の姿を明らかにしようとするものです。

当時の疫病対策は、祈りや祭礼という手段で、予防や軽症化を願うことが中心でした。人々は、集落の辻にわら人形や大わらじを置き、牛頭天王や大杉様を祀り、地域内への疫病侵入を防ぐために一丸となり祭礼を演出し、祈願しています。

一方、幕末の壬生藩医齋藤玄昌（蘭方医）の活躍に見られるように、下野国の医療は確実に進歩しています。その様子は、二宮家と齋藤玄昌との関わり（二宮弥太郎の虎狼痢罹患・金次郎の孫たちの種痘）を通して確認できます。

また、市内に遺された古文書から、報徳仕法実施途中の1861年に、轟村を襲った「疫病」の実態と、「報徳無利息金」を活用した救済支援策について詳しく見ていきます。

「温故知新」、この展示は、我々の喫緊の課題である「ウイズコロナ」に対するヒントが、随所に隠れています。

II 江戸時代の感染症（疫病・流行り病）

江戸時代の人々は、感染性の病気を「疫病」や「流行り病」と呼んでいました。また、この疫病や流行り病は、目に見えない悪い神が引き起こすものと考えていました。その正体が「疫神」です。人々は、疫病と対峙するにあたり、疫神の被害に遇わないよう、あるいは取り付かれても軽く済むよう、個や集団でひたすら神や仏に祈ります。そして、疫神を避けたり、もてなしたりするため、集落が一丸となり、まじないや祭礼を行うようになりしました。具体的には、牛頭天王（おてんのさま）や大杉様（あんばさま）をお祀りして、神輿を繰り出し、獅子を舞い、疫病に相対します。一方、江戸時代も後半になると、西洋医学の導入により種痘などの近代的な医療が発達します。

表1 江戸時代の麻疹・コレラの流行年表

年号	西暦	期間	備考
慶長12年	1607		
元和2年	1616	10月	
正保3年	1646	5月	
慶安2年	1649	3月	
寛文10年	1670	2月	
元禄3年	1690	3月上旬～4年5月	
宝永5年	1708	秋～6年春	
享保15年	1730	9月～16年正月	
宝暦3年	1753	4月～10月	
安永5年	1776	3月末～初秋	
享和3年	1803	3月下旬～6月	
文政5年	1822	8月～10月	西日本を中心にコレラが猛威
文政6年	1823	11月～7年3月	
天保7年	1836	7月～8年正月	
安政5年	1858	6月～6年9月	全国的にコレラが大流行 安政6年7月～12月に二宮弥太郎がコレラに罹患
文久元年	1861	8月	日光神領轟村を流行り病が襲う
文久2年	1862	6月～閏8月	麻疹とコレラが同時流行 夏以降日光神領でも麻疹とコレラが流行

※鈴木則子著『江戸の流行り病』を参考に作成

しかし、従来の神仏への祈りは、後退することなく共存の様相を呈しています。

1 江戸時代の感染症とは

江戸時代の感染症Ⅱ疫病・流行り病の代表格は、「疱瘡」（天然痘や痘瘡とも言う）・「麻疹」（はしか）・「虎狼痢」（コレラ・暴瀉病）です。現在は、これらの予防ワクチンや治療薬があるのであまり恐れられる病気ではありません。しかし、当時は薬も高価で十分に行きわたらず、死亡率も高く繰り返して流行したために、蔓延して多くの命が奪われました。そのため、人々は老若男女を問わず、罹患しても重篤化せずに軽く済むよう、ひたすら神仏へ祈ることに専念していました。

① 疱瘡（天然痘）について

疱瘡は、天然痘ウイルスの感染で発症します。飛沫感染後、約12日間の潜伏を経て高熱となり、その後3～4日で顔・腕・足に発疹が生じます。発疹箇所が膿疱となり、回復すると、かさぶたとなり剥がれ落ちます。その跡が痘痕として残り、容姿が変わるために「痘瘡は見目定め」と言われました。膿疱期に重篤化すると、失明したり死に至る危険もあります。ちなみに、伊達政宗が独眼竜と言われたのも、疱瘡が原因です。人口密度の高い江戸の町では、毎年のように流行しています。なお、疱瘡は一度かかると免疫により再発しないことが知られており、19世紀中頃には、日本でも徐々に種痘（予防のため痘苗を人体に接種する）が普及しています。また、天然痘は1977年以降発生していないため、世界保健機構（WHO）は1980年に天然痘根絶宣言をしました。



↑→疱瘡祝儀（見舞い）受納帳

天明5年（1785）
今市宿商家文書 当館蔵
今市宿の商家が、子供たちの疱瘡の完治を祝った際、町内（上・中・下町）親類縁者・取引先等から完治祝いとして届けられた金品の受け取り覚帳。帳簿の色は疫神の嫌う赤色の和紙を使用している。



表紙

↑疱瘡神五人の詫び証文（写し）長徳4年（998）
日光市嘉多蔵名主文書 当館寄託文書
天然痘をもたらした疱瘡神五人（疫神を擬人化した5人）が書いたとされる詫び証文を写し取り、それを門などに貼ることにより、疱瘡の罹患を避けたり、軽く済むよう祈願したもの。近年、同内容の古文書が関東各地で発見されており、これもその1点である。

② 麻疹（はしか）について

麻疹は、麻疹ウイルスにより起こる感染症です。感染すると、発熱やせきの症状が出て、4～5日間は全身に赤い小さな発疹が続きます。疱瘡よりも感染力が強く、死に至る危険性も高かったようです。死を逃れても失明などの後遺症に苦しむこともあり、「麻疹は命定め」と言われ、とても恐れられた疫病です。麻疹と疱瘡が異なるのは、流行の周期が長いことです。20年～30年周期で流行したために、大人が罹患する場合も多く、爆発的な感染拡大を引き起こしました。

③ 虎狼痢（コレラ）について

コレラは、元々インドの風土病でしたが、欧州列強のインド進出を背景に世界的大流行（パンデミック）となります。日本での最初の流行は、文政5年（1822）です。次の流行の安政5～6年（1858～1859）には、当地でも二宮弥太郎が罹患して大騒動となります。

コレラは、コレラ菌を病原とする経口感染症で、菌の混じった水や食べ物を通して感染します。感染すると、激しい下痢や嘔吐を繰り返し、脱水症状に陥ります。血圧が低下し筋肉の痙攣が起き、最悪の場合は死に至ります。急激に重症化して死亡することが多く、「三日虎狼痢」という異名も付きました。



↑疱瘡絵（左）「金太郎」：歌川芳鶴画・（右）「みみずく」：歌川国芳画
江戸後期 東京都江戸東京博物館蔵

「金太郎」：疱瘡絵には、金太郎をはじめ、八丈島で疱瘡神を追い払ったとされる源為朝や、中国唐の皇帝のマラリアを平癒させた鍾馗など武勇に優れた人物が描かれることが多い。「みみずく」：目が赤い兎と、失明しないように目が大きい赤いみみずくの玩具を描いた疱瘡絵である。



↑浮世絵版画「流行病妙薬奇験」歌川国芳
安政5年（1858）東京都江戸東京博物館蔵
湯飲みを口にする男性から出ている黒い影が「暴瀉病」（コレラのこと）で、飲み薬の芳香散や湿布薬の芥子泥の作り方が書かれている。



↑御用日記（流行の暴瀉病につき、薬法等心得の御達）

安政5年（1858）日光市岩崎名主文書 個人蔵
この史料は、日光奉行所から出された「御達」を岩崎村の名主が書き留めておいたものである。内容は、暴瀉病（コレラ）の予防には、体を冷やさない・温める・大食いの禁止などが必要で、治療薬には芳香散という薬を用いること。嘔吐が激しく、全身が冷える場合は、からし粉とうどん粉を練った薬を下腹や手足に張るのがよい、というようなものであった。



→虎狼狸除獅子舞諸掛帳

文久2年（1862）
日光市上栗山若者文書
上栗山若者蔵
文久2年（1862）の夏は、全国的に麻疹とコレラが同時並行で流行した。この古文書は、上栗山の獅子舞関連文書として保管されていたもので、上栗山村では同年9月に、虎狼狸を予防するために村一丸となり臨時的な獅子舞を実施している。この史料は、その際の会計報告の記録である。



①虫送りのわら人形（日光市日蔭）
②大わらじ（日光市芹沼）
栃木県立博物館蔵

日光市内でも同様の八坂祭が各地で行われており、「おてんのさん」として、多くの人々に親しまれています。特に、栗山地域には、牛頭天王を祀る痕跡が数多く見られると共に、牛頭天王に由来する独自の祭礼（獅子舞や神輿などの渡御）が今も色濃く遺されています。

①牛頭天王を祀る祭礼

牛頭天王を祀る祭礼としては、京都祇園の「八坂祭」が最も有名です。これも元々は、疫神を退散させ疫病を防ぐことを祈願した祭礼で、全国各地に広がっています。

3 疫神と祭礼（人々の祈り）

疫神を擬人化したり、神や仏の姿としたりする中で、「牛頭天王」や「大杉様」、あるいは大わらじやわら人形などが信仰の対象となります。そして、人々はそれらを共同体内で共有していくために、お囃子を演奏し、神輿の渡御・屋台の繰り出し・獅子舞などの演出を行い、一体となって疫病除けの祈願するようになります。わら人形を設置する際に、百万遍念仏を唱えるのも同様の演出です。

その結果、天王社や祇園社は、「八坂神社」・「須賀神社」・「素戔嗚神社」などに社号を変更しています。しかしながら、民衆に浸透した牛頭天王は変化しながらも、今日までしっかりと生き続けています。当地方にも、牛頭天王（特に津嶋牛頭天王が多い）を祀る痕跡・祭礼が根強く残っています。

牛頭天王は、インドの祇園精舎の守護神とも言われますが、神道と仏教のいづれとも言えない、疫病を防ぐ日本固有のものであります。この信仰は、播磨の広峯社（現在の広峯神社）・兵庫県姫路市・京都の祇園社（現在の八坂神社）・京都市東山区・尾張の津嶋天王社（現在の津嶋神社）・愛知県津島市）などから日本各地に広まったと言われています。ところが、明治元年（1868）に明治政府が出した「神仏分離令」により、神と仏を判然（はっきり）とするよう命じられ、それまで神仏習合の状態にあった牛頭天王は、真つ先に表舞台から消えます。

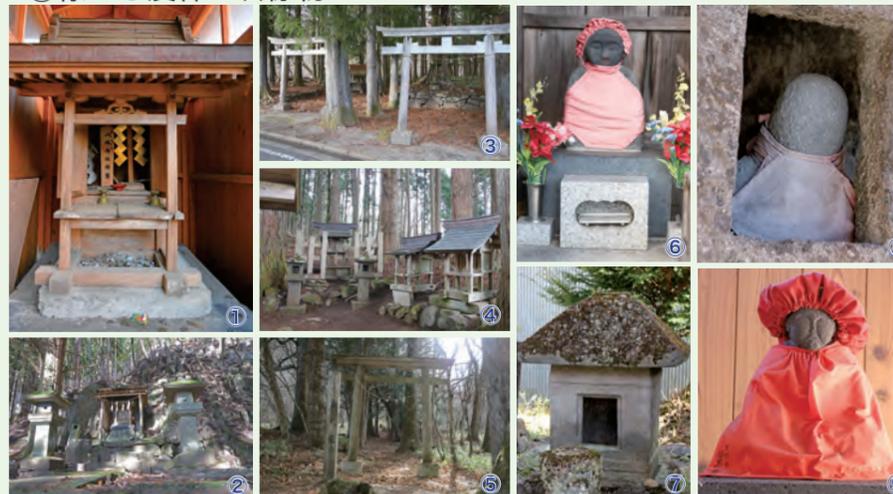
2 疫病を制御する疫神

江戸時代の人々は、疫神には、疫病を発生させたり広めたり、反対に抑制させたり鎮めたりする力（制御力）があると考えていました。そこで、疫神を擬人化したり、神や仏の姿としたりして、信仰の対象とするようになり、また、その象徴が、「牛頭天王」や「大杉様」であり、大わらじやわら人形などです。

茨城県稲敷市阿波の大杉神社を本社とする大杉信仰は、大杉様やあんば様とも呼ばれ、水上交通の安全や疫病退散の神として、利根川・鬼怒川水系周辺や太平洋沿岸で広く信仰されてきました。江戸時代後期には、当市域にも疫病退散の神としてお囃子・祭礼と共に伝搬されています。祭礼の形態としては、お囃子を伴う天狗と神輿の渡御やあんば様への奉納獅子舞などの形で伝承されています。

②大杉様（あんばさま）とは

③様々な疫神の石像物



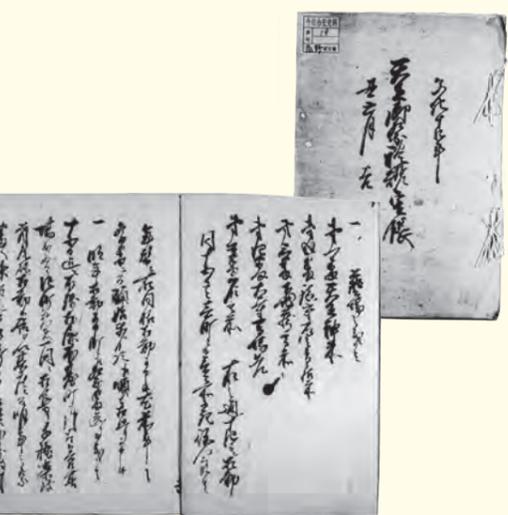
① 御幸町 天王山の八坂神社
② 西町の八坂神社
③ 上栗山 天王様（左）と大日様（右）
④ 野門 天王様（左）と大杉様（中央）
⑤ 川俣 牛頭天王（天王様と八坂様を祀る）
⑥ 緑町くさ地蔵
⑦ 稲荷町 疱瘡神社（虚空蔵尊内）
⑧ 稲荷町 いも地蔵（虚空蔵尊内）
⑨ 宝殿 筋違橋地蔵（はしか地蔵）



↑御幸町の天王祭祭礼用具一式 日光市御幸町自治会蔵

①牛頭天王扁額（宝暦3年1753）
②木像牛頭天王坐像（元治元年1864）
天王祭の御祭神である牛頭天王坐像の厨子に、この像の由来が記されている。元治元年（1864）9月、御宮付の医師山中道仙（療病院）が、享保年間に先祖が作製し龍蔵寺に安置した像が焼失したため、再興したというものである。文字通り、祭神の頭に牛が彫り込まれている。仏師は石屋町の高松徳之助、開眼は慈観（前大僧正）が務めている。

御幸町の天王祭（八坂祭）
現在の御幸町「八坂祭」は、6月15日前後（土・日曜日ずれか）に実施しています。祭礼7日前には、公民館に神輿を備え、飾り付けをします。祭礼当日、神事を行い、神輿の巡行（公民館〜天王山前〜下鉢石町境から石屋町境までの町内大通り〜再び公民館に戻る）をし、御札を配ります。



↑今市宿天王祭礼規定 文化14年（1817）

間之道商家文書 個人蔵
この「規定帳」で注目すべきは、当時の天王祭では、旧暦6月12日に屋台を組み立て、同16日朝までに片付けている点である。中でも、14・15日には、屋台を引き揃え、踊り場で付祭りを実施している。その芸場は、初めに天王神前で踊り、以下瀧尾神社鳥居前・追分地蔵尊前・如来寺参道入口・名主宅前で踊ることを規定している。旧暦6月中旬には、今市宿を挙げて疫病退散の天王祭屋台がにぎやかに繰り出されていた様子が伝わる。



今市 八坂祭神輿



春日町2丁目の彫刻屋台

今市の天王祭（八坂祭）
現在の今市「八坂祭」は、瀧尾神社境内にある八坂神社の祭礼で、八坂神社神輿を7月7日から14日まで奉納し、同14日にはこの神輿が各町内を渡御します。江戸時代には、この祭礼を「天王御祭礼」と呼んでいました。夏に流行する疫病をまぬかれるため、旧暦6月中旬に行われた牛頭天王を祀る祭礼です。

④『分間延絵図』に描かれた疫神



④-1 大沢宿
天王社跡と並木杉
絵図の「天王神」

③ 大沢宿鎮守王子神社
絵図の「疱瘡神」

④-2 移転した大沢町八坂神社

⑤ 文挾宿八坂神社（文挾二荒神社境内）
絵図の「天王」と「大杉神」

① 御幸町天王山八坂神社前の欠けた牛頭天王
絵図の「天王」
② 稲荷町 虚空蔵尊内石祠（側面に「疱瘡神社」とある）
絵図の「疱瘡神」



川俣 獅子舞 大杉大明神幟旗



川俣 獅子舞 大杉様神輿と賽銭箱

川俣のあんば様と獅子舞
川俣は、栗山地域の西半分を占め西奥に位置する集落です。川俣には、栃木県内有数の民俗芸能が遺されていますが、五穀豊穡・無病息災・村内安全を祈願する獅子舞の形態も伝統を色濃く遺しています。現在8月下旬に3日間開催される夏祭りの最終日に行われている大杉様（あんば様）への奉納獅子舞もその一つです。大杉様への奉納舞では、集会所に神輿と賽銭箱が置かれます。神輿の前で「平獅子」が舞われ、途中で獅子唄が謡われ、男女の子供が獅子に酒を飲み、人々が代わる代わる神輿に参拝します。

②大杉様（あんば様）を祀る祭礼
茨城県稲敷市阿波の大杉神社を本社とする大杉信仰は、江戸時代後期に、当市域にも疫病退散の神としてお囃子と祭礼と共に伝搬されています。猪倉・吉沢地域では大杉ばやしと共に天狗の悪魔祓や神輿の渡御を行っています。日光の東町六町や今市相生町などにも神輿を収めた社が祀られています。また、栗山の野門・川俣では大杉神社に奉納する獅子舞が、現在も行われています。

各地の大杉様（あんば様）



① 下猪倉 あんば様 ② 下猪倉 人丸神社内大杉神社 ③・④ 吉沢 あんば様 ⑤ 相生町 大杉神社 ⑥ 東町六町大杉神社（虚空蔵尊内）



小百宿のわら人形と百万遍
小百の各坪では、2月の節分に集落の境や交差路にわら人形を置き、悪魔や疫病が侵入しないよう祈願しています。この祭礼は、大きな数珠を回し、念仏を唱える百万遍念仏を伴っています。胴体の芯や刀にはヌルゲの木を使い、頭には棧俵をかぶります。1年後に新しい人形が置かれるまで集落を守り続けます。

③境や辻に置く魔除け
牛頭天王や大杉様を祀る祭礼とは異なる行事として、外からやってくる悪魔・疫神を地域集落に入れさせないための魔除けの行事があります。境や辻に大わらじ・わら人形・御札などを置くことで魔除けとするものです。こうした魔除けの行事は、県内ではあまり見られなくなり、現在は、現在も市内に若干遺されており、同時に行われている獅子舞や百万遍念仏とともに大変貴重なものとなっています。

① 芹沼 獅子舞 浅間神社大わらじ奉納 ② 芹沼の大わらじ ③ 小百宿のわら人形

上栗山の天王様祭礼

上栗山は、東に黒部、西に野門と接する鬼怒川右岸の集落です。集落の両端には、今も牛頭天王（年不詳）が祀られており、地域の人々の生活を見守り続けています。展示中の幟旗4流は、江戸時代のもので旧暦6月15日の天王様祭礼に掲げられ、長研寺に大切に保管されているものです。集落の北部には、鎮守の春日神社・大日様・天王様が祀られており、神仏習合の様相がくつきりと遺っています。

現在の天王祭は、例年7月15日に近い土・日曜のいずれかに行われており、親類縁者も集まって「津嶋牛頭天王」の幟を掲げ、地域や家内の安全と五穀豊穡を願った牛頭天神輿の渡御が行われています。



① 集落を護る牛頭天王 ② 上栗山 天王様 ③ 上栗山牛頭天神輿添（文化8年6月とある） ④・⑤ 上栗山 天王様祭礼

野門の天王様祭礼

野門は、東に上栗山、西に川俣と接する鬼怒川右岸の集落です。現在の天王様祭礼は、例年7月15日に近い土曜に実施されています。鎮守の大山祇神社境内にある天王様に納められる「墨書牛頭天王」箱を取り出し、掲げながら集落内を回り、病気除けを祈願する祭礼です。注目したいのは、巡回する「墨書牛頭天王」箱です。元禄16年（1703）6月17日に上栗山の浄土宗長研寺第21代の聴譽なる僧が、野門の檀家に対し、疫病除けの祈願をしたものです。世の中の平和と人々の安寧を願う偈文「天下和順」・「日月清明」と「南無阿弥陀仏」の名号を書き留めています。この墨書は、18世紀当初、当地に疫神である牛頭天王を祀る信仰が存在したことを如実に伝えてくれます。



① 野門天王様 ② 野門天王様祭礼 ③ 野門天王社内箱：右から「牛頭天王」「天下和順」「日月清明」「南無阿弥陀仏」とある。

日蔭の天王様祭礼

日蔭は、東に日向、西に黒部と接する鬼怒川右岸の集落です。日蔭の天王様祭礼の特徴は、かつて多くの地域で実施していた天王様への奉納獅子舞が、今も行われている点です（7月の第2土曜日）。祭り前日、鎮守北峯神社で若者による「オコモリ」（みそぎの儀式）が行われます。当日は、獅子二行が「宿」（獅子の準備や酒宴を行う家）を出発し、「街道流し」（笛・太鼓を演奏しながら進む）で鎮守北峯神社へ向かいます。3頭の獅子と氏子が参拝した後、「露払い」（棒と太刀の演技）が行われ、「お山獅子」が一庭奉納されます。このように、日蔭の天王様祭礼は、旧来の天王様への奉納獅子舞の姿を色濃く遺しています。



①・② 日蔭天王様祭礼獅子舞 ③・④ 日蔭獅子舞用具

III 病と医療の発展

江戸の町では、疫病流行の中、庶民向けの養生書が大量に出版されています。その代表が貝原益軒の『養生訓』です。病気を未然に防ぎ、健康を維持する方法を説いた書物でベストセラーでした。

また、江戸幕府の中で、医療政策に最も力を注いだ人物は、8代将軍徳川吉宗です。吉宗は、感染症対策に止まらず、薬草の調査・朝鮮人参の国産化・薬園の拡充など薬の供給体制の整備に努めています。享保年間（1720年代）の日光神領において、朝鮮人参の栽培が試行されたのは、こうした背景があります。

18世紀後半になると、杉田玄白らの西洋解剖書の訳本『解体新書』が出版され、蘭学への関心が高まります。文政7年（1824）には、シーボルトが長崎に鳴瀧塾を開き、蘭学熱がさらに高まります。そうした中、壬生藩では医師の齋藤玄昌らを江戸に遊学させ、蘭学の修業をさせています。壬生藩のこうした先見性は、その後の下野国の医療の発展に大きく貢献することとなります。

1 日光神領の御用作朝鮮種人参の栽培

朝鮮人参は、漢方薬として珍重されてきましたが、高価な輸入品で庶民の手に届きませんでした。その状況を解決しようとしたのが、8代将軍徳川吉宗です。朝鮮人参の国内栽培を計画し、日光神領内で試行をさせ、種から栽培することに成功します。これを「朝鮮種人参」と呼び、18世紀中頃



↑御用朝鮮種人参の栽培木札
明治初年 当館蔵

には、江戸での販売が可能となります。栽培者は「参作人」と呼ばれ、幕府の厳重な管理下に置かれます。幕府の方針により、指導・援助下にある「御用作」の期間と、自由栽培・販売のできる「勝手作」の期間を繰り返します。こうして、日光神領の特産品となった朝鮮種人参は、江戸幕府の薬の供給体制の一翼を担うようになります。

2 蘭学の発展と種痘

（壬生藩医齋藤玄昌の登場）

世間の蘭学への関心が高まる中、齋藤玄昌は、壬生藩の命により江戸に遊学し、蘭医学の修業をします。天保5年（1834）に壬生藩鳥居家の藩医となった玄昌は、天保11年（1840）には、壬生上河岸の刑場で解剖（後に『解体正図』を刊行）を実施し、人体の新知識の吸収に努めています。また、子供6人を疱瘡で亡くしている玄昌が、医師として最も関心を寄せたのは「種痘」の問題でした。嘉永2年（1849）7月、長崎で日本初の牛痘接種が成功しますが、翌年の2月には、玄昌も壬生領内で種痘を開始します。そして、その後も積極的に種痘を普及させます。

なお、「医道巧者」として評判を高めた壬生藩医齋藤玄昌は、嘉永6年（1853）には、二宮金次郎の主治医になっています。

IV 二宮弥太郎の虎狼痢罹患と

金次郎の孫たちへの種痘

金次郎は、「医道巧者」齋藤玄昌の献身的な医療を受けながら、安政3年（1856）10月20日、今市報徳役所で70歳の生涯を閉じます。その後、コレラや疱瘡といった疫病が猛威を振るう中、二宮家と医師齋藤玄昌とは深い繋がりを重ねます。

二宮弥太郎は、安政6年（1859）夏に、コレラに罹患し重篤化しますが、齋藤玄昌の先進的な医療と施薬により一命を取り留めています。また、金次郎の孫で弥太郎の子供たち（金之丞・二宮尊親・延之助・富田高英）も、玄昌による最先端の種痘を受けています。

1 弥太郎の虎狼痢罹患と主治医齋藤玄昌

江戸時代の東日本でコレラが猛威を振るつたのは、安政5〜6年と文久2年（1862）で、断続的に流行し数十万人が命を落とすと言われています。「日記」には、弥太郎が、安政6年の夏にコレラに罹患したため、半年間病床にあり、仕法が停滞している様子が記述されています。

弥太郎の罹患は、7月25日の激しい下痢により発症しています。同28日の夜中、壬生藩医の齋藤玄昌の往診がありました。壬生と今市間は、片道9里（36km）あり、往診には宿泊を伴いますが、玄昌は、弥太郎のために9度の往診（8月に5回）と12回の施薬をするという献身ぶりでした。

一方、玄昌による近代的な医療行為の外に、修験や各地の社寺による病氣平癒のための祈禱や護摩が焚かれています。また、日光奉行所役人・日光山僧侶・小田原や桜町などから多くの関係者が見舞つています。

表2 「報徳役所日記」からみる、二宮弥太郎の虎狼痢罹患の経過一覽

和暦(西暦)	月・日	記載の内容
	7.20	誠明院様(金次郎)の命日(20日)に、邸内一同墓参(報徳役所一同で如来寺へ墓参り。弥太郎は、この日まで外出。)
	7.21	日光奉行所からの呼び出し命令があるが、弥太郎は「不快」を理由に辞退する。
	7.24	昨夜「針治療」したためか、「熱氣甚だし」。殊に「腹痛」のため、今市宿医師の高橋寿伯の診察・服薬を受ける。
	7.25	昼前より「下痢」5・6度あり、寿伯の診察、「痢病」との診断で下痢を服薬する。
	7.26	「痢病」に苦悩、壬生藩医齋藤玄昌(玄正とも表記。金次郎の主治医。1809~1872)へ治療依頼のため、門弟の山中四方八を派遣する。
	7.28	弥太郎「不快」に付、門弟伊東発身が名代として日光奉行所へ行く。
	7.29	齋藤玄昌に治療方依頼し、昨夜半に到着。早速「診察のうえ療養手当」受け、昼食後壬生に帰国する。
	8.02	早朝、門弟大槻久蔵を齋藤玄昌方へ差遣し、治療依頼する。
	8.03	弥太郎「不快」に付、僕豊吉を壬生へ差遣す。
	8.04	齋藤玄昌夜半後に来着、「診察のうえ調薬」。高橋寿伯も罷越す。
	8.06	弥太郎病氣平癒のため、門弟志賀三左衛門が「東照宮拜参」。華蔵院から「御守・供物」頂戴。浄土院より「供物」御菓子頂戴する。今市宿名主覚左衛門ら、弥太郎の見舞いに来る。(以降も同様記事多数あり)
	8.07	桜町陣屋の尾口甚太郎、横田・和田・下物井村惣代ら見舞いに来る。大前権現「護摩祈禱御札」・供物桜町陣屋より来る。小栗神明「護摩祈禱御札」とも。
	8.08	弥太郎病氣「少しく順に趣」(小康)か。門弟久保田周助を齋藤玄昌方へ差遣わし、病氣模様申し述べ、調薬依頼する。華蔵院より「供物」届く。
	8.10	日光奉行所吟味役石川完一郎、病氣見舞いに量齋・羊羹持参する。齋藤玄昌夜に入り来、診察し、その後日光山へ
	8.11	宇津帆之助からの「成田不動尊護摩祈禱御札」・「護符」・供物を桜町陣屋代田信兵衛が持参する。
	8.12	齋藤玄昌、昨夜半日光より来着、「逗留」早屋にて帰国する。
	8.15	門弟志賀三左衛門を齋藤玄昌方へ差遣わし、病氣模様申し述べ、調薬依頼する。
	8.16	相馬中村藩齋藤桑之助、弥太郎病氣のため来入(仕法支援のため)
	8.19	大槻久蔵を齋藤玄昌方へ差遣わすも、玄昌夜に来駕。「診察」後、日光山へ
	8.20	齋藤玄昌日光より16時頃来着、「診察のうえ調薬」し、帰国する。
	8.23	相馬中村藩齋藤久助、弥太郎病氣のため来入(仕法支援のため)
	8.24	門弟山中四方八を齋藤玄昌方へ差遣わし、病氣模様説明し調薬依頼する。相馬藩主から、弥太郎病氣平癒安全の「妙見尊歡喜寺の祈禱御札」到着する。
	8.28	大槻久蔵を齋藤玄昌方へ差遣わし、病氣模様申し述べ、調薬依頼する。
	9.02	華蔵院近辺参詣ついでに、弥太郎の見舞いに立ち寄る。齋藤玄昌刻来駕、「診察のうえ調薬」し、夜分帰国する。
	9.05	僕彦次郎を齋藤玄昌方へ差遣わし、調薬依頼する。
	9.10	日光奉行所吟味役石川完一郎、弥太郎の見舞いに来る。
	9.11	物井村冥加人足瀧蔵到着後「不快」に、最初「下痢」があり、「吐瀉等甚だしく、追々疲勞募る」。高橋寿伯が診察致し、保養す。寿伯、当時流行病の「虎狼痢」と申す。「薬用」尽し、養生するも死去。「焼骨」致し、物井村に送る。
	9.12	「虎狼痢流行」に付、世間不穩。相馬領・真岡一同、「日光参詣いたし度」申すに参詣させる。錦織寿助・大槻古輔付き添う。早朝、僕豊吉を齋藤玄昌方へ差遣わし、調薬依頼(翌日16時頃、調薬持参)
	9.15	「虎狼痢流行」で世間不穩に付、「家内安全祈禱」を千本木村の弥勒院に頼み、陣屋内で祈念する。早朝、僕房之助を齋藤玄昌方へ差遣わし、薬取り(翌日夕持参)
	9.22	大槻久蔵、齋藤玄昌方へ弥太郎容態申し述べたく、差遣わす。
	9.24	山中四方八、弥太郎の「病氣平癒全快」を東照宮に祈願する。僕豊吉を齋藤玄昌方へ差遣わし、弥太郎の診察依頼する。
	9.25	齋藤玄昌夜分に来駕、早速「診察のうえ調薬」
	9.29	破畑彦次郎を齋藤玄昌方へ差遣わし、調薬依頼する。
	10.09	僕豊吉、昨日齋藤玄昌方へ差遣わし、薬取り帰陣
	10.14	修学院大僧正、古峯原参詣ついでに陣内立ち寄り、弥太郎の病体を尋ねる。
	10.21	僕豊吉、齋藤玄昌方へ差遣わし、薬取り(翌日持参)
	10.23	弥太郎「病氣果敢取兼ね」、齋藤玄昌の招待申入れ、夜分来入(翌日、昼飯後帰国)する。
	11.02	破畑文之助、齋藤玄昌方へ差遣わし、薬取り(翌日持参)。
	11.06	中村領手伝人足60人の内30人出立に付、富田久助の教諭後、弥太郎も「面会」する(徐々に回復)。
	11.22	僕茂吉、齋藤玄昌方へ差遣わし、薬取り(24日夕刻持参)。
	12.17	弥太郎「病後初めて、誠明院先生墓を拝す」。それより大谷向新開場初めて「見分」する(外出可能となる)。
	12.20	誠明院先生(金次郎)の命日(20日)にあたり、邸内一同墓参する。
	12.22	弥太郎、「久々病氣全快、今日出勤之事」とある。
	12.27	弥太郎・伊東発身、日光山・日光奉行所へ年末の挨拶に行く。

※記載の内容は、『二宮尊徳全集』第34巻所収の「報徳役所日記」による



↑御用作朝鮮種人参栽培に関する古文書 江戸後期
日光市小来川参作人文書 当館寄託文書
これらの古文書から、朝鮮種人参の栽培が、幕府の厳重な管理のもと行われていたことがわかる。



↑齋藤玄昌を紹介した展示図録
1996『種痘医 齋藤玄昌』・2007『壬生の医療文化史』
共に壬生町立歴史民俗資料館発行

2 玄昌による金次郎の孫たちへの種痘

嘉永2年（1849）7月、長崎で日本初の牛痘接種が成功します。「種痘」に関心を寄せる齋藤玄昌は、翌年2月に、壬生藩営の種痘所を開設しています。玄昌は領内出張種痘の方式により、強制的に種痘を行い、藩全域に種痘を普及させています。

弥太郎の長男金之丞は、安政2年（1855）11月16日に今市の報徳役所で生まれ、生後約百日で、玄昌の種痘を受けます。また、二男の延之助は、安政5年（1858）3月14日に今市で生まれ、翌年3月に多忙な玄昌から種痘を受けています。

表3 「報徳役所日記」と「書簡」からみる、孫たちの種痘実施

和暦(西暦)	月・日	記載の内容	出典
安政3(1856)	2.28	当方小児(金之丞)への種痘のため、壬生藩医の齋藤玄昌が、夜になって今市宿に来る。	日記
	3.06	齋藤玄昌の弟子(佐久間玄悦=後の齋藤元昌)が、金之丞の種痘の見舞い(再種の要不要の確認のため)来る。	日記
安政6(1859)	2.03	二男様(延之助)の種痘について、承知したので、玄昌が日光に行くときに痘苗を持参することを約束している。なお、前段では、壬生藩の下総領村々種痘施行や壬生藩種痘所の種痘など多忙である様子を弥太郎に知らせている。	齋藤玄昌→二宮弥太郎書簡
	2.24	二男延之助の種痘について、繁多の中ではあるが、繰り合わせのうえ、ぜひ行ってほしいことを依頼する。追伸で、当時、日光並びに近村まで痘瘡が流行している様子を伝えている。	二宮弥太郎→齋藤玄昌書簡
	3.02	前日今市宿に来た齋藤玄昌が、小児(延之助か)種痘その外治療を済ませ、壬生に帰る。	日記
	6.28	春に行った二男延之助の種痘について、繁忙・遠路のところ、種痘植付に対するお礼を述べている。その後の状況は、今市宿医師の高橋寿伯の見立てによると、結果良好とのことで、皆安心して伝えている。薬料ともに500足(金1両1分)を門弟の山中四方八に届けさせた。	二宮弥太郎→齋藤玄昌書簡日記

※記載の内容は、『二宮尊徳全集』第5・34巻所収の各年の「報徳役所日記」及び第9巻の「書簡」による

表4 「報徳役所日記」からみる、日光神領内の疫病の様子

和暦(西暦)	月・日	記載の内容
安政5(1858)	9.03	御府内(江戸城下)に、「暴瀉病」(虎狼痢・コレラ)が大流行しており、徐々に真岡・小山辺りでも流行の兆しがある。そのため、その予防・治療法に関する「触書」が日光奉行所から出された。「触書」の内容は、「予防には、体を冷やさない・温める・大食い禁止など。治療薬は、芳香散という薬を用いる。嘔吐が激しく、全身が冷える場合は、からし粉とうどん粉を練った薬を下腹や手足に度々張るべし」とある。
	9.15	報徳役所は、病氣流行に付、日光山の金蔵坊へ「護摩修行」を依頼する。
安政6(1859)	7.29	二宮弥太郎がコレラを発症し、壬生藩医齋藤玄昌の治療を受け始める。(全快は12月下旬)
	9.03	破畑人足4・5人、「下痢等」あり休役。糶葉10貼渡す。
	9.11	物井村冥加人足(ボランティア)の瀧蔵到着後「不快」に、最初「下痢」があり、「吐瀉等甚だしく、追々疲労募る」。高橋寿伯診察致し、保養す。寿伯、当時流行病の「虎狼痢」と申す。「薬用」尽し、養生するも死去する。「焼骨」致し、物井村に送る。
文久元(1861)	9.18	破畑金兵衛「痢病」煩い、真岡へ帰村させる。
	8.07	大槻古輔、轟村を廻村する。
	8.08	轟村「流行病人」共あり、病氣平癒・村内安全の「大般若経祈祷」を依頼し、村役人を呼び、村内対応すること。
	8.09	年寄の次郎左衛門外1人罷出で、村内「大般若経祈祷」が首尾よく終了したことを報告する。
	8.11	大槻古輔、轟村を廻村する。
	8.19	轟村名主見習の五郎左衛門罷出で、「村内流行病益々転流」の由、申し出る。
	8.20	轟村名主の五右衛門、流行病平癒・家内安全の祈祷・時々廻村下され候に付、御礼に来る。
11.27	轟村次郎左衛門が、夏以来「疫病煩い候面々薬用手当」に付、半金の無利無利息借借を願う。患之助一家死去(妻まさは生存)。	
12.28	轟村患之助後家まさの借財金立替に付、村役人彦右衛門・組合弥兵衛付添罷出で、立替金4両余を相渡す。	
文久2(1862)	8.07	門弟新谷源次郎、去月28日より熱氣あり引きこもる。9日目の昨夜より「麻疹」大いに相発す。8日には回復する。山中四方八、「麻疹熱」と相見え今朝より臥す。
	8.09	大澤宿旅籠屋娼妓「流行麻疹」にて客の相手出来兼ね、養い方差支え難渋に付、米30俵の借借を願ひ出る(仕法に成り兼ね不可)。
	8.11	破畑次郎郎その外「麻疹取り付き」候に付、布団4枚破畑善助へ渡す。
	8.22	板橋宿一同「麻疹流行」に付、百姓芳三郎外14人に対し、1軒に玄米1俵ずつ貸渡す。
	8.27	高百村に「麻疹」が流行し、派遣した破畑3人も「麻疹」が取り付たため、帰村させた。
	閏8.05	破畑房五郎、仲蔵「麻疹」かたわら入用に付、預置丹精金の内金1両ずつ渡す。他に日用内金1両1分1朱を世話人留松へ渡す。
	閏8.06	澤又村年寄伊右衛門、昨日「麻疹」見廻りの為罷り越す。
	閏8.21	板橋村遠下・下之内坪に当時流行の「麻疹」が取り付いた、為、御普請を日延した。
	9.07	破畑長十、一昨日壬生藩医齋藤方へ「虎狼痢病用心薬」貰い受たく遣わし候処、今朝帰陣する。
	9.09	岡田良次郎、壬生医齋藤老が昨夜再度病体診察の処、「感冒症」にて、変病等も之無く候。
	11.11	薄井沢村源蔵、「流行病」にて妻並びに子供2人病死仕り候に付、拝借年賦金返納願候も相済まざる談申し諭す。
	12.04	小佐越村庄右衛門、当7月中「麻疹」にて家内子供病死いたし候に付、借金8両の返済に差支え借借願ひ。
12.13	瀬尾村五郎右衛門外1人、当年の「麻疹外病難」に付、仕法借借金年賦金御年延願候も、相済まざる旨申し諭す。	
12.17	大澤宿善右衛門外4人、当7月以来の「麻疹並びに流行病」にて難渋手当金4両借借の願書差し出す。	

※記載の内容は、『二宮尊徳全集』第34巻所収の各年の「報徳役所日記」による

V 報徳仕法を襲った流行り病とその救済

日光神領の報徳仕法は、嘉永6年(1853)〜慶応4年(1868)まで、16年間実施されました。その間、特に安政6年(1859)・文久元年(1861)・文久2年(1862)には、疫病(コレラと麻疹)により仕法が一時的に停滞しています。

安政6年は、二宮弥太郎(仕法の中心人物)がコレラに罹患し、重篤化しています。文久元年には、仕法実施に最も熱心であった轟村を疫病が襲います。そして、文久2年は、肥大化した疫病が日光神領内の宿場や村々に押し寄せ、麻疹とコレラが同時に蔓延します。

そうした中、仕法メニューの一つで、人々の生活安定を図るための「報徳無利無利息金」が、その窮地を救います。

1 流行り病が報徳仕法を襲った

表4は、「報徳役所日記」(『二宮尊徳全集』所収)から、日光神領内の疫病関連記述を整理したものです。表1の年表で見たように、安政5・6年は、全国的にコレラが大流行し、文久2年も、麻疹とコレラが同時に蔓延しています。

日光神領内では、安政5年9月に、日光奉行所から暴瀉病(コレラ)予防・治療の「御達」(通達)が出ています。翌年夏には、二宮弥太郎が、コレラ

に感染し重篤化します。しかし、壬生藩医の齋藤玄昌の献身的な治療により、一命を取り留めました。同年、破畑人足(小田原や真岡などからも参加する報徳役所の土木作業員)も、コレラに感染しています。

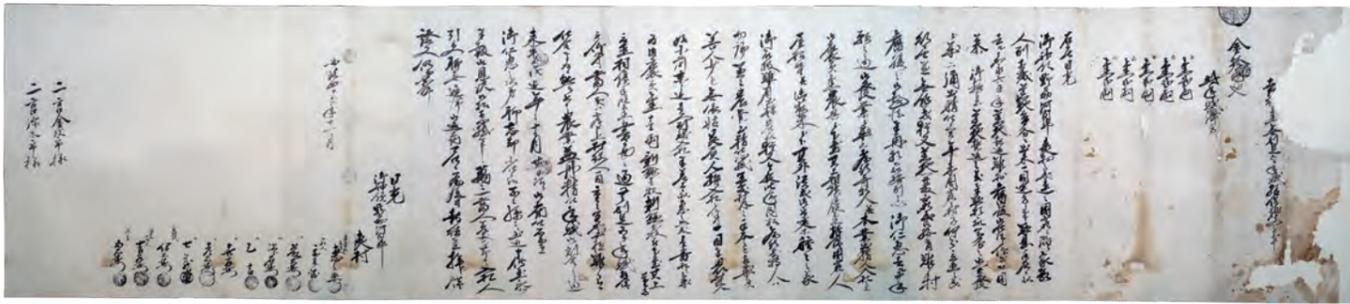
文久元年は、報徳仕法の一村式仕法(モデル事業)を実施している轟村が、疫病(詳しい病名は不明)に襲われ大騒動となります。翌年は、日光神領全体に麻疹とコレラが同時に蔓延し、報徳役所の門弟から各宿場・村々まで疫病が広まり、多くの死亡者が出ています。

2 流行り病に襲われた患之助一家とその救済

地域に残された古文書を活用して、轟村の患之助一家の暮らしぶりを再現してみます。

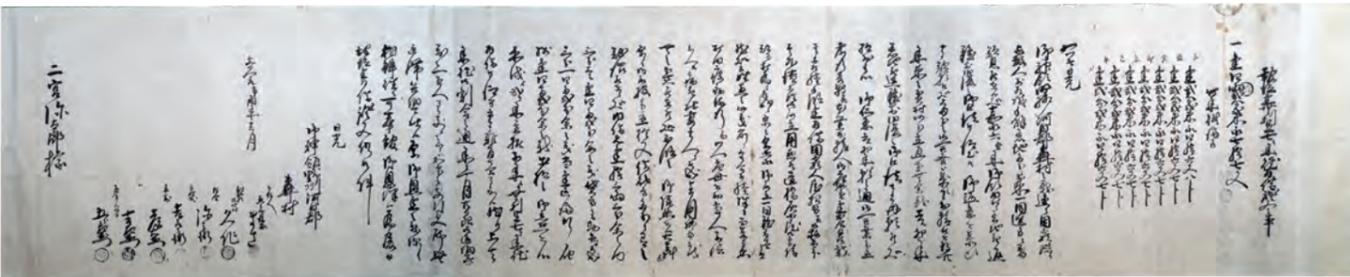
①嘉永7年(1854)の「宗門人別帳」によると、仕法開始時の患之助一家は、世帯主・患之助20歳・母・つる58歳・兄・久次34歳(出稼中)の3人家族で、馬を1疋所持。持高5石9斗6升の中規模農家です。

②安政2年(1855)11月、不幸続きの一家は、借財を抱え、報徳無利無利息金を借用します。翌年2月には、轟村の極難困窮人入札(選挙)で4番札となり、報徳役所から御救い米2斗を与えられます。



↑報徳無利無利息金借借証文(患之助金10両) 安政4年(1857) 当館寄託文書

この年の「農業出精奇特人」(働き者)は、入札(村民27人による選挙)の結果、8票を獲得した患之助が、壹番札(1位)であった。そこで、報徳役所から、①金1両・②新鋏1枚・③新鎌2枚の褒美が与えられる。さらに、この文書で、生活安定のために、④金10両の「報徳無利無利息金」借用を認められている。



↑報徳無利無利息金七ヶ年賦借借証文(まさ金4両2分) 文久元年(1861) 当館寄託文書

夏以降、轟村を襲った疫病により、まさは、母つる66歳・夫患之助28歳・幼児の3人を次々に亡くし、一人残される。不幸続きで薬代も払えないまさに、残された借金総額は、13両3分余。そこで、轟村と報徳役所が調整し、借金の3分の1を勘弁(返済不用)、3分の1を即返済。そして、この文書は、残り3分の1の4両2分余について、2年据え置き(7ヶ年賦)の「報徳無利無利息金」を借用し、返済することとしたものである。

③その後、一生懸命働いた恵之助は、村民から認められ出精奇特人（働き者）入札で1番札を獲得し、表彰されます。この頃、恵之助は、「まさ」と結婚し一子を授かります。

④しかし、文久元年（1861）7月頃から疫病が流行し、轟村は混乱します。恵之助一家も4人全員が罹患し、母つる（66歳）・恵之助（28歳）・子供（年齢不詳）の3人が命を落とし、妻まさ（22歳）だけが残されます。借財の嵩んだ（13両3分余）まさを不憫に思った報徳役所は、報徳無利息金を活用した借財返済方法の指導を行います。

⑤この後、残されたまさ（22歳）は、上久我村（現鹿沼市）から茂吉（26歳）から2か年間、弥太郎の下僕を務めた者（を後夫に迎えています（養子縁組））。

①報徳無利息金について

報徳役所では、仕法を実施する中で、個々の生活改善のために、報徳無利息金の貸付を行っています。具体的には、出精奇特人（働き者）への貸付・肥料や馬の購入・借財の返済・荒地開発・葉購入などに使われました。返済は、金額や内容により、1・3・5・7年賦があります。なお、貸付を借りた者は、完済後の翌年に年賦返済額と同額を報徳役所に、「報徳冥加金」（利息ではない）を上納します。報徳役所は、それを受領し、仕法の原資（資金）に組み込み、他の困窮者救済に役立たせる仕組みです。この報徳冥加金が、この貸付金の特質であり、報

徳金を借用して「支えられた者」が、冥加金を推譲することにより、他者を「支える者」に変化します。

②恵之助一家を支えた報徳無利息金

轟村一村式仕法に対する報徳役所からの支出の状況を見ると、支出総額は、1644両余（約1億2000万円）で、その内、各種の報徳無利息金に要した費用は、442両余（約3300万円）でした。これは、支出全体の4分の1を超えており、報徳役所がいかに人々の生活安定を促す「報徳無利息金貸付」を重視していたかがわかります。

疫病に襲われた轟村の恵之助一家で、一人残された「まさ」の生活を救ったのは、村内の互助機能と報徳仕法の報徳無利息金貸付の存在でした。このように、報徳無利息金は、疫病に襲われ、苦しんでいる日光神領の人々を救済する一つの手段となっていました。

VI むすびに

江戸時代の人々は、疫病が蔓延する中、疫病を制御するとされる牛頭天王や大杉様を集落・共同体内に祀りました。そして、一丸となって各種の祭礼を演出（神輿を担ぎ・屋台を繰り出し・獅子を舞うなど）しながら、疫病の侵入を防ぐうとしていました。

一方、幕末期には壬生藩の齋藤玄昌の種痘に見られるように、新たな先進的医療を取り入れ、人々の生命を救おうとする動きも出現しています。

なお、弥太郎のコレラ治療の動向や、金次郎の孫たちへの種痘接種の経過から見えるのは、一つは、従来からの祈りに真摯にすぎない姿であり、もう一つは、最新の医療に期待を寄せる切実な姿という、異なる二つの側面です。

また、報徳仕法からは、報徳無利息金という独自の施策を組み入れながら、人々の生活の安定を促し、自立させようとするやさしいまなざしが見て取れます。

私たちは、江戸時代の人々と同じように、今後も、感染症と付き合っていくかなければなりません。「ウイズコロナ」とも言われていますが、そのためのヒントは、こうした先人達の真摯な生き方から見出すことができるのではないのでしょうか。

参考文献

- ・安藤優一郎『江戸幕府の感染症対策』2020 集英社
- ・大嶽浩良編『栃木の流行り病 伝染病 感染症』2021 下野新聞社
- ・酒井シヅ『病が語る日本史』2008 講談社
- ・鈴木則子『江戸の流行り病』2012 吉川弘文館
- ・高橋敏『江戸のコレラ騒動』2020 角川書店
- ・手塚雅身『瀧尾神社祭礼と今市宿400年（増補版）』2020 自費出版
- ・畑中章宏『廃仏毀釈』2021 筑摩書房
- ・獨協出版会『とちぎメデイカルヒストリー』2013
- ・『収蔵庫は宝の山』2021 栃木県立博物館企画展図録
- ・『人々のくらしといのり』上河内民俗資料館企画展図録
- 2021 宇都宮市教育委員会
- ・『種痘医 齋藤玄昌』1996 壬生町立歴史民俗資料館企画展図録
- ・『壬生の医療文化史』2007 壬生町立歴史民俗資料館企画展図録

パンフレット作成・展示協力者

テーマ展を開催するにあたり、以下の方々に協力いただきました。

記して御礼申し上げます。（敬称略）

東京都江戸東京博物館・栃木県立博物館・壬生町立歴史民俗資料館
今市報徳二宮神社・御幸町自治会・芹沼獅子舞保存会・日蔭若者
上栗山祭典保存会・野門自治会

江連政喜・大類元一・大類元美・齋藤信義・関口守正・平英一
高野定夫・福田純夫

発行：日光市二宮尊徳記念館（日光市今市 304-1）

電話：0288（25）7333 / FAX：0288（25）7334

発行日：令和4年1月18日

※本書を無断で転載・複製することを禁じます。